

妖劍紀聞 前編

泉鏡花作

—

花は、何んだと言つて、花に嫌な花と言ふのはありませんが、私は幼い時から、杜若の花が大好きです。金屏風に活けたのも、園生の池に咲いたのも、いづれ選好みをする事はありませんやうなもの、田の野川、麓の小流、丸木橋の袖などにひとり、紫の色も香も淑ましかに、はら／＼開いたのは、一寸した旅や、野掛の道などで、ふと逢ひますと、水は浅くても淀んで居ても、深く忘れぬ馴染のやうな気がして、其のまゝには通り切れず、何んとなく視めて居るうちに可懐いやうな、床いやうな、そして小兒に返つた気がして、嬉しい中にも、もの寂いやうで、涙ぐましいまで、暖かな日も身に泌みます。

其が、此の頃、此の話を聞きました。——其の中に、あり／＼と其處に咲いて、目に見えるやうな杜若があるのです。五六軒、賤が伏屋とも申すべ

き一廓ひとくわの小家こいへの前後ぜんごに、門背戸かどせどを靜しづかに流ながれる細ほそい水みづがありまして、一瀬せさつ颯さつと玉たまを散ちらして灌そくぐ處ところ、其その杜若かきつばたに對たいして、若わかい、美うつくしい着瘦きやせの、すつきりとした鳥追とりおひがイたむで居あます。――姿すがたと景色けしきに、胸むねのせまるやうな思おもひがしました。かほよ花はなとさへ言いひます、其その由縁ゆかりの色いろを、うまく寫うつせますか何どうか、分わかりませんが――では、お物語ものがたりをいたします。

――中なかにお化ばけも一寸ちよつと出でます、又またかとおつしやつては不可いけません。――

場所ばしよは、現たゞいま今の小石川こいしかはせきくち關口たきの瀧たき――  
りから公園こうえんに成なりました。――以前いぜんは大洗堰おほあらひせきと言いつた、あれから駒塚橋こまづかばしを渡わたつて、井ゐの頭がしらの、あの上水じやうすゐべりを、崖がけから目白臺めじろだいへ抜ぬける間道かんだうが、其その杜若かきつ若ばたが咲さき、娘むすめの鳥追とりおひが立たつた處ところであります。

時ときは寛政くわんせいの五年ねん卯月うづつき七日かの事ことなのであります。時じせ節柄つがら、降ふりつ續ついた卯うの花はなくだしが此この朝あささらりと霽あがりました。花紫はなむらさきの濡色ぬれいろも思おもはれる、お話はなしも、すぐ其その場所ばしよへ參まゐりたいのであります、間あひだに少々せうく道行みちゆきがあ

ります。

扨て、雨は晴れましたが、夜霽りと言ふので、戸外は嚇と眩いくらゐな、それで居て何處となく、しつとりして、日向は少し汗の出る、些と蒸しますくらゐな陽氣で、牛込赤城下から、鐵砲の組屋敷を、今の中里へ掛ると、最う此の道が躰なのであります。廣々とした早苗の青田で、其の一方の奥に、小藪のやうに青々と茂つたのは茗荷畠。早稲田を掛けて目白の森が、ぽつと薄煙りに煙つて、大日坂上に午やゝ過ぐる、陽の輝に、崖の土が薄赤う染まつたのは、やがて咲出でむとする躑躅の、行く春のなごりに思亂るゝ陽炎に又ほんのりと血を通はす、初夏の色であります、遠く視めても薄り暑さを覺える、其處を涼しく彩つて、蒼空の下に翠を流すのは、音羽九町を見通しの辻の柳でありました。中里の此の躰筋を、描いたやうに三個の人が通る。

一人は武家で、一人は道行を着た法體で、一人は小姓風采の美少年であります。武家と少年は足駄掛で、坊さん頭の就中脊の低いのが雪駄穿で、ちやら

りと先達に立つた處は、状を變へ、姿を窺した、微  
行の辨財天と毘沙門天に、野幫間がついたやうに見  
えますが、何として、坊さんは、そんなものではあり  
ません。

其の坊さんが、前途に袖を開きながら、

「御覽せい。．．．田畠を見通しの、づゝと、

あの、青んだ裡に、何となく水氣が立つて、此の陽  
氣ゆゑに、ふは／＼と靄が動くやうに見えませうな。  
あれが關口の大洗堰でありますよ。いや武藏野の、  
それ、遁水と言ふ、昔の面影が偲ばれます。」

武家が、

「如何にも。」

と眉を展げて言ひました、言ふ人たちも、餘所目  
には、日影に映る遁水の、水田の縁を、薄靄に裏ま  
れて通るのであります。

坊さんは眉の厳しい割に、ふつくりした頬で、莞爾しながら、

「又、あれなる水氣の中に、船を俯向けにしたやうに屋根が見えますな。あれが即ち水車小屋であります。豊島屋半兵衛と言ふのが、名代の箱樋を用ゐて、井の頭上水を引いて、水車の大きなのを繰りますが、此は見事ぢや。依て、何と、御代々の將軍家、公が御見物にお成り遊ばされますぞ。」

と眉を伏せて、一寸頭を下げましたので。

「は、はあ。」と武家が敬ふやうに應じます。

「水車あればこそぢや、粉屋風情が、冥伽に餘ると言はうか、恐多いと申さうか、申すも難有い事のために、御成門を立派にしつらへて、此は不斷、錠を下ろして注連を結うてありますで、いづれ道すがらお目に掛けます。又些と間を置いて、五六本樹立の中の、堂の屋根が一つ見えませう。瀧本院と申して不動堂ぢや。瀧不動、瀧不動と言ひますよ。別當は、武骨な遅い修験ぢやが、矢張り斯の流儀を嗜

みますので、なか／＼話せませす。御堂へも道すがら参詣して、庫裏で一服なども可うございませう。」

と話しながら中里の躰を歩きます。道しるべに立つた扱て此の坊さんは、小日向水道町本法寺（浄土宗にて現存）の住職、後嗣に寺を譲つて、一時は石切橋邊の穀屋の庭内へ庵を結んで隠居したのであります。賣婦あがりだと言ふ、地主の女房の、成上りの、權高で傲慢なものと、濕地で小蛇が夥多しく、による／＼と這廻るのに辟易して、當時は赤城明神の境内に閑居する、武城赤北真人前廓然盡十方庵、大淨敬順衲老と此の人の書いた隨筆紀行の類には長い名がありますが、他は、其の俳號の以風さんと呼び、陰では一煎さんで通りました。

次第は――石州流の茶道に事實堪納で、自から別に煎茶の一流を立てた、名譽の隠居。春秋の野掛遊山を好みました處から、手提げに拵へた疊昆爐、これで到る處、池、川、井戸の水を汲んで其の場で煎茶を樂む。また野蒲團と稱へて、桐油紙と木綿を裏表に手製で貼つて、雨には合羽、晴には道芝に敷

いて蒲團ふとんにして、腹はら這はひもすれば坐すわりもします。こゝで例れいの疊たぐみ昆爐こんろを開ひらいて、一煎せんをいたす、（一煎せんをいたす）と言いふのが口癖くちくせ、こゝに於あて、人呼ひとよんで一煎せんさん。

但たゞし、遊歴いうれきの都度つとど、興きようの趣おもむくに從したがつて、旅店はたごや、茶店ちやの襖障子ふすまじやうじ、堂宮だうみやの欄干らんかん、柱はしらなどに、矢立やたてを取とり出し、以風いふうと名告なつて、愚ぐにもつかない發句ほくくの樂らくがきをするのと、宗門敵しうもんがたきで、無暗むやみに日蓮宗にちれんしうの祖師そしと惡口あくこうを吐つくほかには、罪つみのない坊さんぼうさんでありました。

或日あるひも、連つれの差支さしつかへで、一人ひとり、向島白鬢むかしのましろひげあたりを徘徊はいくし、綾瀬橋あやせばしの眞中まんなかから、薬罐やくわんに細綱ほそびきで中流ちうりうを汲くで、此これを携たづなへながら、關屋せきやの里さとの日向ひなたを選えらんで、枯かれ野のに唯一たゞひとり人の坊さんぼうさん、即ち野蒲團のふとんに著ちやくと構かまへ、疊たぐみ昆爐こんろに仕掛しかけて、例れいの一煎せん。得意とくいの花橘はなたちばなを舌したの先さきに味あぢはひながら、あはれ、友とももがな、人ひとの來こよかし、一椀わん振舞ふるまはむと野道のみちの前後あとさきをニみすと、ぼく／＼通とほるものは、千住せんじゆかへりの馬士まごか、葛西出かさいでの兄哥せなあばかり、唐だし突ぬけに呼よび留とめて、振舞ふるまはう、と言いふと、馬士まごは曳ひいた馬うまの腹はらを視ながめ、兄哥せなあは肥料桶こへたごの中なかを覗のぞいて、もつ

けな顔で黙つて行く。

田舎まはりの館屋を呼んだが、しかも不思議がつて行抜けるのを、立つて追はうとすると、「わい、狐ぢや」と此は音を上げて、館屋の爺さん、遁げ状にどてん、と、いや、見事に轉んだ。白藏主は苦笑と言ふ數奇者であります。

武家は太塚玄之進、此は可なり知行高の越前の藩士。相連れた美少年は、其の小姓でも又侍の子でもありません。玄之進が鼻屑に引立てゝ居りました同國の住人たりし刀鍛冶の一人子で、高松清三郎と言ふのであります。父母ともに没して、たよりない孤兒と成つたのを、玄之進が我が手許に引取つて、別に扶持するともなく、懇に世話をして居りました。其の少年を江戸詰に伴ふて東上したのであります。玄之進の心では、大都會に良き師匠を求めて、刀鍛冶の修行をさせやうではなくして、實は然うした美少年なのでありますから、寶生か、觀世か、いづれか、宗家に頼つて、弟子入させて、天晴れ、能役者に仕立て、やがて藩主の許に昵近させたい希望なの

であつたと言ひます。此事は――しかし豫め清三郎に旨を含め、少年も其の志で居たか何うかは、此の話の前後の模様ではよく分りません。大方は玄之進一人だけの胸中ではなかつたらうかと思はれる節があるのであります。

處で、玄之進も茶の道は同じ流儀に携つて、豫て十方庵一煎坊宗匠と懇意な中でありましたが、月に七日の日は、赤城の其の十方庵に、話の會と稱へる集合があつて、花、俳諧の宗匠たち、武家方は固より出家、醫師、當時の狂歌士詩人畫師、書家などから、不思議な禁厭をするのだの、灸點屋もあれば、講師も居る。俳優も交つて、一日を睦む茶を煮て話しくらすと言ふ催しでありまして、いづれも世間つきあひの廣い人たち、屹度能樂の家元に知己もあつて、夫から便宜も得られやう心づもりで、清三郎を引合はせかた／＼、例日の今日、玄之進は朝から十方庵を音信れたのであります。

掃除も届き、釜も松風の音を立て、坊さんは早く客を待構へて居たのであります。たけれど、此の日

に限つて、玄之進清三郎二人のほか、誰も定連の訪ふものがなかつたのであります。

午に成りました、十方庵は午餉の振舞をしたのであります。再び話に花が咲いても、まだ立ち寄るものがなかつたので、久しぶりの好天氣、垂籠めてばかりも曲がなすと、玄之進が、まだ大洗堰の風景を見ず、目の眺望を知らないと言ふ處から、十方庵が案内しやうと、例の疊昆爐、野蒲團を巻いて手提げにして、やがて二人を導びいたのであります。

坊さんが、手提を片手に背伸をして、

「あれに……水音が最う聞こえますよ。」

瀧本院不動堂の参詣。關口の大瀧の見物を済まして、此の三人の一行は、やがて駒留橋を渡つて、草の土手に掛りました。

水は陽炎を流したやうに、どんよりと一條、動くともなく靡いて居る……まことに同じ水が、もと来た方へ僅少の距離で、忽ちあの大瀧と成つて、一煽り轟と翻つて落ちて、すぐに江戸川に成つて流れやうとは思はれないくらい、もの静か。坊さんの手には吹消す風の憂慮のない摺火打があつて、玄之進もともに銜煙管で、――いつも坊さんの恚うした時の口癖の――（ふらめき）ながら歩きました。

時に、此の道すがら話しかはされました話題と言ふのは、不動堂の法印が留守だつた事であります。修験にしる法印にしる、別當の用のあるのが出歩くに何の不思議もないのであります、實は此の人们に耳よりな事は、今度法印が思立つて、来る十

三日の午から、十方庵のひそみに習ふ、話の會を、御堂の別當に於て催す筈で、遠方は文づかひ、近まはりには法印が、自から案内に廻つて、それ／＼招くので、留寺も其がためと言ふのを、こゝに年久い老僕の、形は皺びて、布子は古いが、キビ／＼とした江戸前の口調で聞かされました。其が一つ。

……はいとして、最う一つは、もの好でない限り、さして用のない處とは言ひながら、豊島家の大水車から掛けて、不動堂、大瀧の水筋二三町、餘りにも寂しく、人ツ子一人通らない。參詣のものもなし、草も餘所よりは丈のびて、水も暗いやうに見え、御堂の鰐口も淵に臨んで口を開けるか、と思はれて、森閑として人氣勢もなく、裏へ廻ると、其の老僕が、みいらの如く縁の日南に乾びついて居ましたほどで。

例年は最う此の時節に成ると、瀧口に垢離を取る信心なのが少くない。網で雑魚を掬ふものもあれば、水車寄の流には、婦たちの洗濯をするのが多い。小屋番がからかつて、水をかけ合ふ。繁吹もさゞめい

て賑にぎわかなのでありますのに、何どうした事ことか、と坊ばうさんが、件くだんの老僕らうぼくに尋たづねますと、其その時とき、眉まゆを顰ひそめて老僕らうぼくの話はなしました事ことが、其それから此處こゝへ……歩あ行きながらの主おもなる話題わだいに上のぼりましたのであります

が。  
堰せきの落口おちぐちが二ふたつに成なつて居ゐて、大瀧おほたき小瀧こたきと言いひました。一ひとすぢ條は巾は一間けんばかり、一ひとすぢ條は三尺じやくあま餘り、高たかさ各々おの／＼九尺しやうく。一ひとすぢ條は巾は一間けんばかり、一ひとすぢ條は三尺じやくあま餘り、高たかさ勿論もちろんこれは見物けんぶつをして通とほつて來きたので、當日たうじつは雨上りあめあがの濁水だくすい勢猛いきほひまつに、凄すさまじい音おとを立て、水みづ嵩かさも日頃ひごろに倍ばいし、イたゝすむ足許あしもとを震ふるはすばかりで、久ひさしく見みるに耐たへなかつたと申まをします。一ひとすぢ條は三尺じやくあま餘り、高たかさ不動堂ふどうだうの方ほうへ二三間げん落おつる處ところに、並ならんで水底みなそこの穴あなが二個ふたつあります。大瀧おほたきの下したが大鉛盤おほすりばちで、毎年まいねんこゝへ引ひき込こまめて溺おほれて人死ひとじにが多いおほので、昔むかしから堰口せきぐちの魔所ましよと稱とまへる。……誰だれも知しつて、恐おそれて避さけるのでありますけれども、夏場なつばは泳およぐもの、螢ほたるに遊あそぶもの、男女だんぢよとも四五人にんは屹きつと命いのちを落おとします。然しかるに、一昨をとゝ年しきよねん去年しきよねんと續つづけて、人死ひとじにの數かずが激にわかに殖ふへて、八九人にんと成なり、今年ことしは水みづぬるむ頃ころから今いまに及およんで六人にんを數かずへた可恐おそろしさ。水みづへ入はいる處ところの沙汰さたではありませぬ、岸きし

を行くものさへ足すくみ目くるめく、と言ふのであり  
ますから、卯月の白晝の幻の暗闇かと疑はれて、  
瀬に散る波も山茨の花白く、里の卯の花のこぼるゝ  
風情して、大江戸小石川水道町の町はづれが、直ち  
に深山路の光景を見せたのは無理もないやうに思は  
れるのであります。

「話は半分とな、實は存じて居りましたよ。風説  
は聞かぬでもありませんだ。が。」

と赤城の坊さんが、こゝに其の沙汰最中、改めて  
舌を捲いて申します。

「私方なども、薄々申傳へるやうに存じますが、  
現在其の場に立向うて見もし聞きもしたので駭きま  
した。」

と此は越前の國の住人邸は常盤橋うちに住居する  
玄之進が應じました。……朝晴れに足駄穿で出向い  
たゞけ、此の方は赤城より人捕穴の風説も遠い。

少年は黙つて水を見ながら歩行いて居ました。黒

こそで  
小袖の紋着に萌黄の袴、臙鞘の細身の一腰、と言ふ  
すがた  
姿が、目白の崖下の草の汀に水際立つて、瀧から、  
いや、其の水の穴から、抜出した、ものゝ精のやう  
に綺麗な見える。髪艶やかに色白く、眉の秀でた細  
面。

四

「川幅でも積られます。したゝかな大穴とも存ぜられんが、石瓦などで口を塞ぐと申す方角はないものでござらうか。」

と玄之進が言ふ下に、

「いや／＼、其は既に試みました。」

「はゝあ、如何様、町々、或は講中の企てぞ。」

「なか／＼然やうな軽々しい事ではありません。」

恐れながら御公儀に於て。

「ホゝウ、それは／＼。」

「偶々御承知でもありませんが、先年此の小石川切支丹阪下の切支丹屋敷がお取壊しに成りました。」

其砌夥多い捨石を、幾輛ともなく車に積んで、あれから第六天、私が先住の本法寺前からづゝと曳出して、此で大鉛盤小鉛盤を埋めたのであります。御公儀の思召は廣大ぢや、三日ばかり續きました。車の通る町筋は豪い賑かで、祭禮のやうに提灯を點ける。高張を立てる、見物も夥多しく出でました。町家の

小兒たちは旗を振つて騒いだもので、誰が教へるともなく、旗には河童退治と書きました。私はまだ其の頃、石切橋に居たが、近所の腕白ものに頼まれて、河童退治、其の旗を戯れに認めますのに、河童、河伯、河太郎、妙でない、水虎の字を當てました、水虎退治。

「成程。」

「何せい、公儀の御威光ぢや。さしもの魔の穴も、水面に装するほど、切支丹屋敷の其の捨石で埋まりましてな、水は瀬となり、石に激して、親獅子兒獅子の頭毛を亂すやうに波を立てた。私も現に見ました。不動堂の縁から、法印と並んで此を視ながら、御公儀のお慈悲なれば、魔所も今は神の庭、祭禮の舞臺に舞を舞ふよ、と漫に感涙に咽んだのであります。すが、何と其が、翌朝、二日目、三日目の朝には、夢のやうに波も消えて、石は缺片一つ影もない。二つの穴はもとの通り、黄昏時の藍瓶のやうに、静まり返つたのでありますよ。此の事は、しかし、餘り世上に沙汰をしませぬ。水虎が馬鹿にしたやうで、

御威光にかゝはらうかの遠慮から、至極と思はれま  
す。

私も赤城へ越しました。

此が一年、昨年今年と續けて、然やうに人を殺  
すと言ふは、魔の穴が、世俗に申す、面當をいたす  
やうで、何とも言語同斷な儀であります、切て、  
其にしては世上の取沙汰が割合に静なのは不思議な  
やうで、時々出會まする法印までが、然ほどには話  
もいたさなんだが、何う言ふものでありますかな。  
まのあたり視て、餘りの寂寞さ、一驚を吃しました  
て。」

と、うしろ見られる趣で、早く渡越した駒留橋の、  
其さへ魔界を隔つ怪い横雲のやうな思で振向きます  
のと、ともに玄之進は誘はれて見返りました。

「いや御坊、其は恠やうでござらう。堂の留守番  
のあの老僕の。口振でも察せられました。――  
きはどく人の死ぬことを申立てるのは……」

度穴をお塞ぎ下された、其のな、將軍家の御威光を  
饒舌るものゝ口からも蔑にするやに相當つて、憚多  
いためゆゑに相違ござらん。しかし、其の中で、茶  
話の一會は、・・・・法印一段の風流でござる  
な。」

「何か仔細がありません、此には・・・・」  
と一煎坊は打案ずる體で、

「唯今の如き有様では、引續き參詣も絶えて、御  
堂とても立行きますまい。法印が催します會と言ふ  
はわれら、別懇のものを招いて、何か相談事かも分  
りませぬ。すれば魔ものを對手の事ぢや。丸腰長袖  
の輩は一同ものゝ用に立ちさうにもありません。話  
をお慰みかたノ、あなたにも御參會が願はれま  
いか。」

「お邪魔でなくば、参りませう。お役には立ちま  
すまいが。」

「いやノ、お腰のものだけでも、どんなに心強い  
か知れませぬ。」

「彼處にお宮がございますね。」

と清三郎がはじめて言った。立向った崖の上には二株の大銀杏が、並んでスツクと中空に高き石段を包んで聳えた、奥に、咲残つた紅椿を、ちら／＼と、屋根に鏤めた森の中の祠が見えます。

「おゝ、椿の宮。」

「神様は？」

「八幡宮。」

「氏神様。」

と俯向いて、掌に額を當てました。清三郎の臍丈けた姿を熟と視ながら、一煎坊は、うつかりしたのが偶と心着いたやうに、

「さ、此の阪を目白へ上ります。・・・胸突

阪と申すが、御覽の通り、些と足駄では御難儀ぢ

や。」

五

處ところが、雪駄せつたの難儀なんぎな事ことは、足駄穿あしだばきのやうなもので  
は無なかつたのであります。

「あれ／＼。」

一煎坊せんぼうは坂さかを抱だくやうにして、腰こしで泳およいで、

「あれ／＼、此これは、迂すべる。」

「、迂すべりますな。」

と玄之進げんのしんも行惱ゆきなやんで、

「いやどツこい。」

「どツこい、」

と拍子ひょうしに掛かつて、一煎坊せんぼうが、ぱつちの尻端折しりはしをりに成な  
つた時は、玄之進げんのしんが袴はかまの股立ももたちを取とりました。此この方ほう  
は一步ひとあしぐらゐづゝ辛からくも上のぼるが、一煎坊せんぼうと來きた日ひに  
は、

「これは、迂すべる。」

迂すべるとばかりで、つるり／＼と蛙股かへるまたに脚あしを捻ねじり、  
手てを掛かけずに足袋たびを脱ぬぐ輕業かるわざと云いつた形かたちで、雪駄せつたを  
土つちに持扱もちあつかつて、

「迂る／＼、なか／＼、迂る、これは一通りでない。」

と汗を掻いて眞赤に成る、と背後から、背中を押さうかとする様に、ト然う思つたらしく立つた清三郎が、

「御坊さま、私が背負をして差上げませう。」

「や、戯れを。」

と苦笑をしながら、

「背は低うても、私はこれ肥つた方ぢや。其の細りとしたのが、何として、串戯ばかり、其處どころではないで、どつこい。」

と又、迂る。

玄之進が横崖の笹の根に縋つて振向いた。

「背負ひませうとも、大丈夫。」

「ほう。」

「なりふりに似合はず、荒もので力がござる。……水泳などは、國表、九頭龍川の早瀬で鍛へて、宛如の河童……」

「あゝ、少時しばらく。聞いたばかりでも背筋せすぢの方が擦くすくつたい。――扱さては背負おぶつても下くだされやうが、其その足駄穿あしたばきで何なんとして。」

「はだしに成なれば、仔細わげはございませんから。」  
と、澄すましたものでありました。

「何なんとも、何なんとも。」

藻搔もがいて、迂すべる兩足りやうあしを踏留ふみとめると、其その志こゝろを頂いたいて手てを上げましたが、

「御深切ごしんせつは忝かたじけないが、法師はふしが此この體ていで、眞日中まっぴなかに此この阪さかを、あなたに背負おぶはれて上のぼつては、現世げんせにあるまじい稀有けふな形かたちで、目白臺めじろだいが魔まの穴あなに成なりかねません。ほう、いや、玄之進げんのしんどの、案内者あんないしやの不調法ぶてうほふ、申譯まをしわけもありませぬが、直じき此この路みちの傍わきに間道かんだうがありますよ。其それを參まれば仔細しさいない、樂々らくらくと參まられます。御苦勞ごくろうながら、阪下さかしたへ一度ひとお引返ひきかへしを願ねがひませうかな。」

清三郎は流るゝやうに、最う衝と下りました。

玄之進とても、身體のあがきに振抜くまいと、刀の柄前に手を掛けつゝ、願はくば抜いて切つて竹の杖でも拵へたい處なので、一議のあらう筈はありません。

「迂りましたな。」

「すべりました。」

二人は吻と息を吐いて、此から、もとの土手を、崖について、小半町あとへ引返すと、小溝の流に一本橋が、一寸一跨ぎに架つて居ました。此處が所謂間道なので、

渡つて入ると、口許は狭く、内擴がりの一廓。ぼつとほてるぐらゐの日當りの赤土で、鮑貝のやうな形のなだらかな窪地で、草處々、縁は浅く、奥は崖を築いて樹林がこんもりと高い。其處を抜けて目白臺へ出らるゝのでありますが、其の周圍を環取つて、左に四軒右に三軒。

海邊だと繪に描いて、蛤が煙を噴きさうな茅茸の  
低い小家がりました。いづれも非人小屋、穢多の  
住居なのでありまして、唯これだけを、こぼれの宿  
とも呼びました。果敢さは斯る日南の中にも、北南  
いづれも、陰に成つて、家は穴のやうに薄暗いので  
あります。背戸から軒下を繞つて小川が流れて居  
ます。上水のあまりではなく、目白臺に湧く清水を、  
次第に引いて落したので、彼方此方笈を渡したのは、  
此を飲水にする事と、すぐに頸かれるのであります  
が、二つばかり、何にするともなく、一抱、五月幟  
の飾のやうな水車を仕掛けましたのは、將軍のお成  
さへあると言ふ、近所のあの水車を見やう見眞似に、  
小供たちに慰みに見せるか、大人が樂むか、いづれ  
にも、其の時代の人情では、狐狸が、なまじひ人間  
の眞似をするやうでもものゝあはれが見えつゝも、ぎ  
しり／＼と切齒をするやうに寂しく廻つて居たので  
あります。

が、此處の事で――

清い流に二三輪、はら／＼咲いた杜若。

花の紫は、薄萌黄の葉ながら、根の霞に黄金粉を

刷はいて、堆うづたかく、美うつくしく見みえました。最も早はや鮑あはびがひ貝ひのも  
のはありません、此この景けしき色しきは、御ご殿てんの大おほ奥おくに、弄もてあそ  
ばれた貝かひおふひ蔽ひの土と佐さの極ごく彩さい色しきに似にて、伏ふせ屋やも玉たまの臺うたなで  
ありません。

其その何どの家いへも、仙せん人にんのかくれ家がのやうに、日ひ中なか、  
寂ひっそり寞りとして居ゐましたつけ。

氣け勢はひがしたので、戸とくち口ちに鍋なべ釜かま鑄あかけ掛かけもの、直なほしの荷に  
ある、土ど間まに向むかつて、一せん煎ばう坊ふが聲こゑを掛かけました。

「あ、これ／＼通とほるよ。．．．．胸むね突つき阪ざかは雨あま上あが  
りで、如どう何も、辻すべつて歩あるかれぬ。通とほるよ、御ご免めんよ。  
構かま内へうちを通とほるよ、此こ處ゝを通とほして下くださいよ。」

「はい。」  
と聲こゑさへ、紫むらさの面おも影かげ立たつ、薄うす暗くらい土ど間まに居ゐて、ほ  
んのりと面おも暫ちく返へん事じをしました。――出しゅ家つげの姿すがた  
も見みえながら、いづれ世よにある三にん人に、身みを恥はぢて、  
はなじろんで、我わが家やを楯たてに、其それまで忍しのんだらしいの  
が、一せん煎ばう坊ふの以もつての外ほか丁てい寧ねいな挨あい拶さつに、隠かくれをほせな

かつたものと見えます。

「はい／＼。」

と若い聲で、尚ほ返事を疊んで、框に取つた三味線は、四ツ乳を白く小狗のやうに落したが、かぶり掛けた編笠は、忘れたやうに片手に取りつゝ、弱腰をすら／＼と、結立ての島田の艶、雫も嬌態もこぼれるやうに、杜若より目覺しく媚めいた鳥追の娘が、素足の雪に緋縮緬、小流の軒へ出ました。

「何うぞお通り遊ばして。」

「通るぞ。」

と玄之進も思はず言ひます。

「通るよ。」

「お静においで遊ばしましー」

口紅の影さへ水にさします、見送るやうに、慇懃に、淺黄鹿子の腰紐の小腰を屈めて會釋をしました。

「姉さん。」

清三郎が、何とした、つか／＼と引返した。引返

したと思ふと、流の岸に袴を折つて低く居て、

「あの、私に此の花を下さいませんか。」

武藏野の歌の風情を其のまゝに、紫の一本の、  
一輪こゝに咲いて居て、鳥追の娘とは、狭い一つ  
橋を隔てゝ、男が却つて、根占めのやうに、水の活  
けたる、雙の花。

「えゝ、何の、まあ……」

と、顔を仰がれ目眩しさうに、颯と臉の染まる時、  
美少年も、玉の如き額の汗を拭きました。

「おつしやる事はありません、お取りなさいまし  
とも、――と申しました處で、水にひとりで咲き  
ました、まあ、私のものゝやうに差上げがましくつ  
てお恥う存じます、――あれ貴方、――」

折取らうとする葉も莖も、花のゆら／＼と流に靡  
いて撓ふを見て、

「根ごとお引きなさいましな。――いゝえ、  
それではお手が汚れませうねえ。お待ちなさいまし

よ、唯今。」

と、すつと入ると、急足の小刻みに、三味線の前を衝と引返して、持出づる薄刃の庖丁。

幽に指尖の震へながら、清三郎の掛けた手に、杜若の莖を持添へつゝ、せめては切る葉の長かれと、情を知つた婦の優しさ。颯と水面を削るやうに横状に當てた薄刃は、若鮎の白銀の背を閃めかして、指切をするやうに。血の湧くやうに水にちらめいた紅、揺らめく袖口だつたのであります。

「はい。」

「いゝえ。」

嗜みに持った新しい手拭を、手を清めよとて流越しに、

「はい。」と出すのを、

「いゝえ。」

手は汚れはしませんと、清三郎は、袴のあひゞきに納めました、片手に花を捧げながら。

婦をんなは爾時そのとき俯向うつむいて、其その白地しろぢなのを銜くはえました。

「難有ありがたう。」

清三郎せいざうはスツと立たつた、花はなはうつむけに持替もちかへま  
した。莖くきはまだ短みじかいののに、其その紫むらさきの、地摺ぢずりに見みえた  
のは、水みづに宿やどつた心こころであります。

此この體ていを、一煎坊せんぱうと玄之進げんのしんは、遠とほい處ところに、人界じんがい、  
仙境せんきやう、域みきを隔へだて、百年もくとせも経たつた昔むかしを覗のぞくやうに、  
影かげもぼやけて、二人ふたり立たつて茫然ぼうぜんと視ながめて居ありました。

それから程もありません、我家を離れた、出口に近い水車の前に、三味線を小脇に、編笠を犇と眼深に、着流しの腰のきりゝとした、繪のやうな鳥追が一人ゝむで、恍惚と奥の樹立を視ながら立つて居ました。

同じ娘なのであります。

然れば、美女である筈。小屋の、關口に近い處から、美しさをたとへて、濡髪の一ーお町と言って、町家、屋敷、山の手に人の知らないものゝない鳥追なのでありますから。

忽ち、吃驚して水を見ました。

目白へ續く崖の樹立から、瞳を水に伏せたのは、其の梢から颯と飛んで、ものが流れたやうな驚きやうでありました。

唯見ると、すら／＼と、なぞへの水を流れて来た、杜若の花が、はつと爪立つ、お町の足許を、這つて、

花を裏返しに翻ると思ふと、瀬を潜り状に、其の水車に掛つて、くるりと一つ廻りました。

まだ早咲なので、荅を解いた花の数は、數へてお町が知つて居た。―― 苳つて棄てる薄さへ、三日の月、七日の頃は、水に一穂も落ちはせぬ。

其の人の立去つたあたりから、こゝに流れた杜若、流したぬしは知れませう。

「清三郎どの、今のは穢多ぢやぞ。御身が汚れる。」

「えゝ、汚らはしい、出世前だ。」

玄之進と諸聲の、言の下に、清三郎は、思はず手を離して水に棄てた。

杜若の花は又水車に廻りました、廻りつゝ玉なす雫を散らしたのであります。

お町は熟と視て居ました。

中肉に、清くあぶらづいた白い手を、思ふ状伸ば

したが、届けば廻つて遁げるので、取はづし、取は  
づす・・・あの鳥目は手に渡すもの、土へ投げ  
ては屈めないで受取らぬと言つた　ー　身を緊  
めて華奢に着瘦自慢の鳥追の、身のこなしが隨意な  
らないので、立直つて三味線の轉進で、身をすぐに  
屹と壓へる、と水車は止まりました。途端にリンと  
響いたと思ふと、三の絲がプツリと切れた。

あはれ、其の絲で、葉の亂れかゝる杜若の根を結  
んで、懷紙に巻添へて、乳に届くまで襟元深く、由  
縁の色を懷に、頭を花に埋むるばかり、瘦せた桃の  
樹にトンと身を凭せて、悄乎して、締つた帯の間か  
ら同じ紫の絲入を取り出すと、葎を抜くかと、かへの  
絲、なよ／＼と手を擧げて、斜めに轉進を卷いた時、  
編笠を透く濃い睫毛の、ぱつちりとした目元から、  
其の花に、はら／＼と落ちた雫は玉の散るより輝き  
ました。

此の時、大洗堰の瀧の音が、笏をするかと、二つ、  
二つの水底の穴に落ちるやうに、どどと物凄く聞こ  
えました。森を越えて目白臺まで屹と響いたに相違

ない。

## 七

此の日、椿八幡の大銀杏の高い梢に、夕鴉が胡麻を撒いたやうに、バツと騒いで、日は早稲田の森に沈むだ、黄昏時の事であります。

崖添の垢離場の土手に、朦朧と立つた婦が一人、帯を手繰つて弱腰をすらりと脱ぐと、捌けて曳いた裳とともに、撫肩をすりと落とす。其處に色の燃ゆるやうな姿が見えたが、其も瀬の影に奪はれると、たゞ引結ふたは腰ばかり、眞白な雪の膚が、角ぐむ、蘆に膝から消えて、水に次第に沈む胸に、杜若の花を抱いて居て、ふつくりと乳の裏すく流の、やがて、それも沈みました。七日月の廣刃の鎌が閃いて、搔切つたやうに、痛々しくも首ばかり、頬にあてた花も黒髪の鬢はかくれて、瀧が音なく、姿見を並べて掛けると、人を捕る魔の大鉛盤小鉛盤が、ざつ／＼と鳴るのであります。

完

【妖劍奇聞 前編・